

平成30年産「アルプス米」コシヒカリ栽培こよみ(JA米)

品質向上は天候に左右されない「土づくり」から

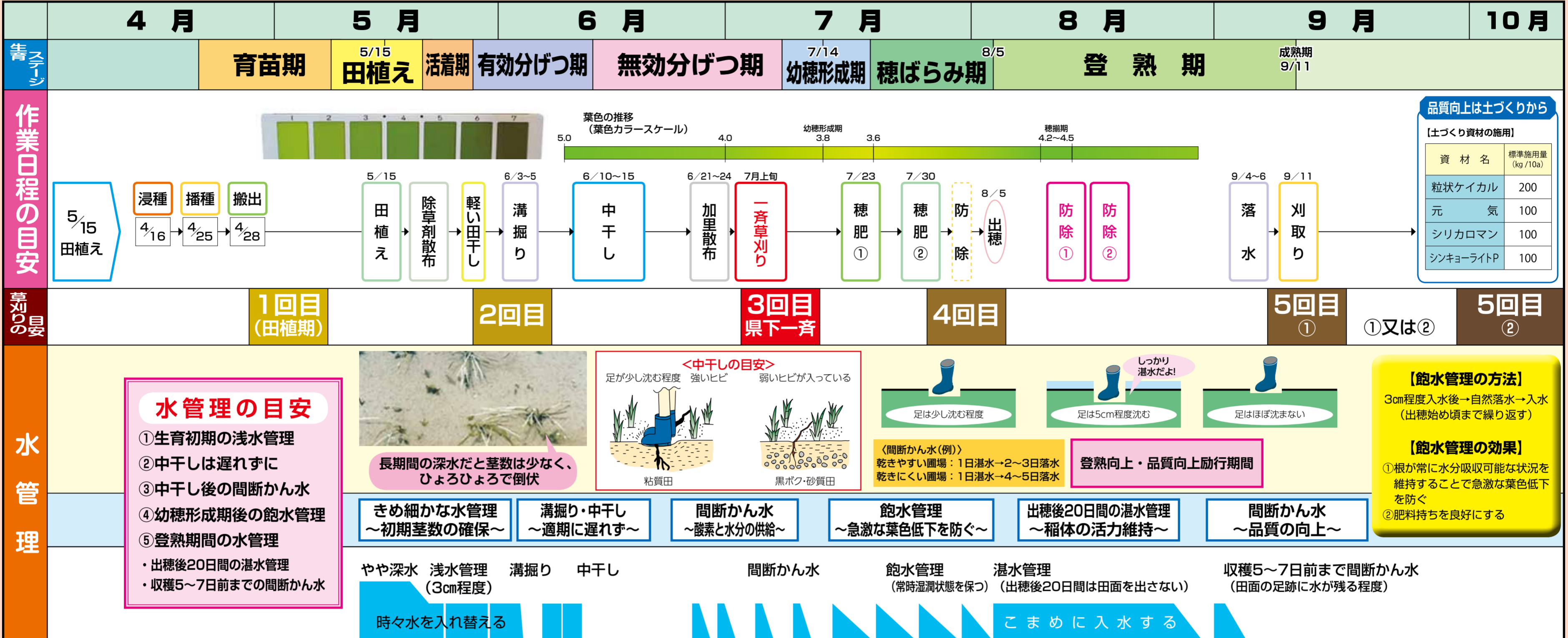
アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

収量構成の目安 (540kg/10a)

収量構成	目安
m ² 当たり穂数(本)	400
1穂着粒数(粒)	70
m ² 当たり着粒数(粒)	28,000
登熟歩合(%)	87
玄米千粒重(g)	22.5

高品質なアルプス米につなげる6つのポイント

- 土づくりの徹底
- 5/15を中心とした田植えと70株植の推進
- 溝掘りと田植え後1か月からの中干し
- 適期に適正な防除で被害を防止
- 水管理の徹底
- 適期収穫



水管理の目安

- 生育初期の浅水管理
- 中干しは遅れず
- 中干し後の間断かん水
- 幼穂形成期後の飽水管理
- 登熟期間の水管理

- 出穂後20日間の湛水管理
- 収穫5~7日前までの間断かん水

水管理の方法
3cm程度入水後→自然落水→入水(出穂始め頃まで繰り返す)

水管理の効果
①根が常に水分吸収可能な状態を維持することで急激な葉色低下を防ぐ
②肥料持ちを良好にする

土づくり
●稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
●土づくり資材や堆肥を施用する。

適正な乾燥調製
●19mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
●水分14.5~15.0%に仕上げる。
●粗糲率85~90%頃に刈り取る。
●高温年は80%から

適期収穫
●フェーン時はあらかじめ入水する。
●刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。

出穂後20日間の湛水管理
●生育ステージに合わせて防除を実施する。

防除の徹底
●1回目は穂穂期
●2回目は穂穂期

中干しは適期に開始
●強すぎる中干しに注意する。
●田植え1か月後頃を目安に開始する。

溝掘りは確実に
●活潑な浅水管理をする。
●植付深さは3cm。
●植付本数は株当たり3~4本。
●栽植密度は坪当たり70株を確保する。
●育苗機による防除を実施する。
●基肥は基準量を確保する。

田植えは5月15日を中心
●田植え時期に応じた計画的な育苗を行う。

健苗育成
●代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
●ゆつくりと耕起し、作土深を15cm以上確保する。

耕起・代かき
●確実に施用する。
●秋施用できなかった場合は、土づくり資材を

土づくり

4月25日を中心とした播種

○5月15日を中心としたコシヒカリの田植えに合わせ、播種日は4月25日を中心とする。
○育苗日数は20日以内を目安とし、老化苗の発生を防止する。

浸種日	播種日	田植日	出穂期
4/8頃	4/18頃	5/10	8/3頃
4/16頃	4/25頃	5/15	8/5頃
4/24頃	5/2頃	5/20	8/8頃

育苗日数が20日程度でも、苗の生育量は十分に確保できる!

栽植密度は70株/坪

溝掘りと田植え1か月後頃からの中干し

○中干しが遅れると、弱勢分げつが多く発生したり、根が少なくなり品質が低下しますので田植えの1か月後を目安に、遅れないよう中干しを開始する。
○中干し開始前には、圃場全体へ入排水を短時間で均一に行うため、溝を設置する。

適正な中干し
●葉が直立
●茎が太い
●根が多い

中干し未実施
●下葉が枯れる
●茎が細い
●根が少ない

中干しの有無による稲の姿

乗用管理機での溝掘り

適期で適正な防除で被害を防止!!

病害虫防除体系

【育苗基本防除】 育苗機薬剤は、規定の薬量(50g/箱)を厳守し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象病害虫
ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	いもち病、白葉枯病、イネミズソウムシ、イネドクイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ
Dr.オリゼフェルテラ粒剤	50g/箱	緑化期~移植当日	いもち病、イネミズソウムシ、イネドクイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ツマグロヨコバイ、(白葉枯病)
エパーゴルワイド箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	いもち病、白葉枯病、紋枯病、イネミズソウムシ、イネドクイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

※紋枯病の常発地の場合

【本田基本防除】 粉剤、液剤体系

防除時期	随時防除		基本防除	
	出穂10日前頃	出穂始め(随時)	穂穂期	傾穂期
粉剤	バリダシン粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	バリダジョーカー粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	ラプサイドキラップ粉剤 DL 4kg/10a (収穫7日前まで)	スタークル粉剤 DL 3kg/10a (収穫7日前まで)
液剤	バリダシン液剤 5,000倍 (収穫14日前まで)	バリダシン液剤 5,000倍 (収穫14日前まで) M.R. ジョーカー-EW 2,000倍 (収穫14日前まで)	ラプサイドフロアブル 1,000倍 (収穫7日前まで) キラップフロアブル 1,000倍 (収穫14日前まで)	スタークル液剤 10,000倍 (収穫7日前まで)
対象病害虫	紋枯病等	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、紋枯病等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

除草剤散布は遅れずに

雑草防除体系

- 5cm程度の水深を確認する。
- 除草剤散布後7日間は落水やかけ流しをしない。

体系処理(初期剤+中期剤または一発処理剤): 雑草の発生が多い圃場

初期剤: メテオ1キロ粒剤 1kg/10a (田植時・田植直後~5日まで), マネエクト1キロ粒剤 1kg/10a (田植後3~5日まで), メテオフロアブル 500ml/10a (田植時・田植直後~5日まで)

一発処理剤を散布 (初期剤散布の7~10日後散布)

中期剤: フィゴールSM1キロ粒剤 1kg/10a (田植後20~30日/ヒエ3.5葉期まで), サンナンチ1キロ粒剤 1kg/10a (田植後15日~ヒエ3.0葉期まで(但し、収穫60日前まで))

一発処理(初中期一発剤): 雑草の発生が少ない圃場

ピクシエアース1キロ粒剤 1kg/10a (田植時・田植直後~ヒエ2.0葉期まで), ウィナー1キロ粒剤51 1kg/10a (田植時・田植直後~ヒエ4.0葉期(但し、収穫60日前まで)), アビログロウMX1キロ粒剤 1kg/10a (田植後3日~ヒエ2.5葉期まで), ウィナー1キロ粒剤 500g/10a (田植直後~ヒエ2.0葉期まで), アビログロウMXジャンボ 400g/10a (田植後3日~ヒエ2.5葉期まで), サラブレッドRXフロアブル 500ml/10a (田植直後~ヒエ2.0葉期まで)

※雑草が残った場合 [ノビエと広葉雑草が残った場合] テクケン1キロ粒剤 1kg/10a (田植後15日~ヒエ4.0葉期(但し、収穫60日前まで)) [広葉雑草が残った場合] パサラン粒剤 3~4kg/10a 落水散布 (田植後15日~5日(但し、収穫60日前まで)) [ノビエが残った場合] クリンチャー1キロ粒剤(ヒエのみ) 1kg/10a (田植後7日~ヒエ4.0葉期まで), 1.5kg/10a (田植後25日~ヒエ5.0葉期まで(但し、収穫30日前まで)), ヒエクリン1キロ粒剤(ヒエのみ) 1kg/10a (田植後15日~ヒエ4.0葉期まで(但し、収穫45日前まで))

土壌に応じた適正な施肥量

コシヒカリの基肥施用基準

生育量を確保するために、基肥量はしっかりと施用する。

土壌区分	肥効調節型肥料		分施肥体系(基肥+穂肥2回)					
	<標準タイプ>	<省カタイプ>	基肥	穂肥				
砂壤土	LPss コシヒカリ1号	35	けい酸加里入り LPssコシヒカリ	45	基肥206 又は 基肥555	32	10	13
					側条施肥 施用量(kg/10a)	26		
壤土 黒ボク	LPss コシヒカリ2号	30	けい酸加里入り LPssコシヒカリ	40	基肥206 又は 基肥555	25	10	12
					側条施肥 施用量(kg/10a)	20		
粘質土	LPss コシヒカリ2号	27	けい酸加里入り LPssコシヒカリ	35	基肥206 又は 基肥555	23	10	10
					側条施肥 施用量(kg/10a)	19		

初期除草剤の適正使用

①代かきから田植えまでの日数を長くしすぎない。
②軟弱苗の使用や極端な浅植えを避け、適切な水管理を行う。
③薬害軽減のため、初期除草剤マッシュ1キロ粒剤は移植後3日以降の使用とする。
●田植同時除草剤は、薬害を受けやすいことから、上記の①を守り田植後の入水をゆるやかにする。

◎高品質・低コスト生産にカントリーエレベーターを積極的に利用しましょう!